

# 子どもの自己肯定感を高めるための 教師によるアプローチの仕方

## ー 習熟度別少人数指導における授業実践 ー

学籍番号 199350

氏名 松本 莉奈

主指導教員 鈴木 真由子

### 1. 背景と目的

平成30年度に内閣府が実施した子ども若者白書より、満13～29歳の若者を対象に、「自己肯定感」に対する意識調査を行った結果、諸外国（ドイツ、フランス、イギリス、アメリカ、スウェーデン、韓国）と比較して非常に低いことが浮き彫りとなった。質問項目の「自分自身に満足している」に対して、「そう思う」、「どちらかと言えばそう思う」と肯定的な回答をした者は、諸外国は70～90%だったのに対して、日本は45.1%と最も低い結果である。また、「自分には長所がある」という質問項目に対し、肯定的な回答をした者は、諸外国の多くが90%前後であったのに対して、日本は62.2%という結果に至っている。

そこで、児童の自己肯定感に着目し、実習校の児童の実態を踏まえて習熟度別少人数指導での授業実践を行うことで、児童の自己肯定感の向上を検討すること、またhyper-QUも活用しながら学習意欲と自己肯定感に相関関係があるのかを明らかにすることを目的とする。本研究においては、自己肯定感の定義を「自分のことが好きだ」、「自分には良いところがある」と肯定的に評価する感情のこととする。

### 2. 研究方法

#### (1) 質問紙調査, hyper-QU による児童の実態把握

自己肯定感, 学習に関する質問項目を作成し, 対象となる4年生児童計27名の協力の下, 質問紙調査を実施する。また, 3年時のhyper-QUの結果より, クラスの学級集団, 学習指導方法の検討を行う。以上を基礎資料とし, 活用しながら, 児童の実態把握をする。

#### (2) レディネステスト, 単元前質問紙調査による児童の実態把握と授業実践

授業実践は第4学年算数科「四角形」の1単元を担当する。また習熟度別学習指導を基本とした授業形態で行うこととする。授業実践にあたり児童の学習状態, 学習への意識を確認するため, 算数科本単元「四角形」に関連する既習学習の理解度の測定(レディネステスト), コース希望調査, 学習に関する単元開始前質問紙調査を実施する。授業においては既習学習の振り返りや児童が発表できる機会を増やすこと, 小単元終了時の振り返りカードの記述を行うことで, 児童の学習意欲と自己肯定感の促進を目指す。

#### (3) 児童の変容の読み取り

授業実践後にも質問紙調査を実施し, 自己肯定感・学習に関する児童の変容を確かめる。またhyper-QUの結果を活用し, 自己肯定感と学習意欲との関連性を確かめる。さらに, 学習意欲と学校生活意欲総合点に相関関係についても分析を行う。全体の結果に限らず, 個別の質問紙調査, hyper-QU, 児童の振り返りカード, ノートなどを参考にし, 児童の変化を分析・考察する。

### 3. 研究結果

(1)自己肯定感に関する質問紙調査の結果より、「自分のことが好きだ」が44.4%であり、「自分には良いところがある」が70.3%であった。また、3年時のhyper-QUの結果から学級集団は縦に伸びたプロットとなっており、リレーションの確立度にややばらつきが見られるため、対象児童の学級集団は小集団に値し、学習指導方法として少人数学習指導が効果的であると考えられる。

(2)授業実践における習熟度別少人数学習指導のクラス分けにおいては、レディネステストの得点を基本とし、6～13/13点満点中の児童を①コース、また0～5/13点満点中の児童を②コースとした。また単元開始前の質問紙調査の結果より、図形の学習に対する苦手意識、発表に対する苦手意識を持っている児童が多いことが明らかとなった。授業実践では積極的に挙手して発言する児童の姿や、振り返りカードに前向きな評定や感想を書く児童が多く見られた。加えてポストテストの点数において、①コースでは、+10点、②コースでは、+3.7点とどちらのコースからも平均点の増加が確認できた。

(3)「自分のことが好きだ」に肯定的な回答をした児童の割合は、55.6%となり、11.2%増加したが、「自分には良いところがある」に肯定的な回答をした児童の割合は、51.9%となり、18.4%減少した。本研究における算数科1単元の授業実践からは、全体として自己肯定感に大きな変化を確認することはできなかった。

「図形の学習が好きだ」に肯定的な回答をした児童の割合は、39.8%増加した。また「算数の授業で発表することが好き」では33.4%、「作図をするのが好きだ」では13.6%の増加が確認でき、児童の図形の学習や発表に対する意識の向上が見られた。

hyper-QUの学習意欲得点と自己肯定感の質問項目の両者に肯定的な回答をした児童の割合は3年時83.3%、4年時91.7%であったことから、自己肯定感が高い児童は、学習意欲も高い傾向にあることがわかった。また、2年時から4年時の学習意欲得点かつ学級生活意欲総合点が高かった児童の割合をデータ分析したところ、7割5分～9割となり、正の相関関係があったことから、関連性があることを確認することができた。

### 4. 成果と課題

今回児童の自己肯定感をあげる試みとして少人数での授業実践を行なった結果、質問紙調査の学習意欲に肯定的な回答をする児童の割合の増加、ポストテストの平均点の増加が確認でき、学習意欲を高めることには直結した。しかし自己肯定感に関しては減少している項目があったため向上したとは言えなかった。

hyper-QUのデータからは、自己肯定感が高い児童は、学習意欲得点も高い傾向にあることが明らかとなり、自己肯定感と学習意欲の関連性も確認することができた。また学習意欲得点と学校生活意欲総合点(満足度)には正の相関関係があり、それぞれが影響しあっていると考えられる。

自己肯定感を向上させる取り組みとして、学校教育全体、また年間を通して連携をとりながら、児童にかかる言葉の選び方や授業の進め方をしていく重要性や学習場面だけでなく児童の良さに気づき、一人でも多くの児童の自己肯定感を高めることの必要性を感じた。今後、自己肯定感を育む取り組みを積極的に取り入れながら、教育現場で児童と関わっていききたい。